

---

# エースはJ O K E R

カトラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エースはJOKER

### 【Nコード】

N7584J

### 【作者名】

カトラス

### 【あらすじ】

甲子園を目指す弱小高校野球部の話です。

青春どたばたラブコメにします。

11月に開催されるアルファポリス青春小説大賞に参加させる作品です。プロットは完成しておりますので11月までの間、推敲を重ねて執筆いたします。

それと、青春大賞を狙っておりますので、読んでくださった方で、誤字、脱字、言い回し等おかしなところを指摘してくださいと、非常に助かります。よければ教えてやってくださいませ。

## 春の珍事

ジリジリと肌を焦がすような雲一つない青空からの日差し。額からほとぼしる大粒の汗と土で汚れたユニフォーム。

グラウンドに木霊するランニング中の掛け声。

いつまで続くか分からない腕立てふせにうさぎ跳び。

そして、監督の罵声とマネージャーの黄色いエール。

あの暑い 熱い夏のグラウンドには、俺達の青春はきつとそこにあった。

そう、夢中になって白球を追いかけた夏のあの日に。

俺達にとつては大記録のかかった試合だった。

大記録つてのは、ここまでのところ仲間であるチームメイトが誰一人として一塁のベース上に立つものはいないってことだ。

つまり、このバッターが出塁出来なかつたら、俺達高校野球部は完全試合という不名誉な結果を相手チームに献上させてしまうことになるのだった。

しかも、学年も体格も一回り小さい中学の野球部が相手だからたまったものじゃない。

そんな状況の中、最後のバッターになるかも知れない神崎が拳を口に当て「オウ」と気合の雄たけびを上げた。そしてバットをくるくると二、三回軽く回して相手を威嚇すると、脇を締めて打撃体勢に入った。

俺に出来ることはただひたすらに「当たってくれ」と神崎のバットがボールを真芯でとらえ火が出るような打球をかつ飛ばしてもらうことを祈るのみである。

いがぐり頭のぼうずが一丁前の投手気取りでロージンバックを指

先につけると、投球フォームに入った。

中学生にしては、球速がはやい方のストレートだった。しかし所詮は中学生打てない球ではないと、ここまで空振り三振を三回喫してる俺は思った。

バシユッとミットにボールが吸い込まれる音がして、審判がストライクと声を上げる。

相手チームの応援しかない学校のグラウンドには、中学生の保護者だろうか、名前をちゃん付けて呼ぶ声援が飛んでいた。そんな中、外野の守備の後ろでは、サッカー部がボールを蹴って走り回っている。

チームメイト達も、そんなおばちゃん応援団に負けないように、ベンチから声を出していたたまれない声援を送った。

「当たつても塁に出ろ！」

そんな、チームメイトの声援をあざ笑うかのように、キャッチャーは外角にミットを構えた。

相手投手は再び投球フォームを開始すると、キャッチャーのミットめがけて大きく手を振った。

バットが空を切る音がする。

「ツーストライク」

瞬く間に追い込まれる神崎と俺達野球部である。

自分がバッターボックスに立つてるわけでもないのに、嫌な汗が額と手のひらから噴き出していた。

たまらず、俺の隣でメガホンだけを強く握っていた鬼監督が声を出す。

「神崎、当たつても、なんでもいいから死ぬ気で塁に出ろ！」

とても、指導者とは思えない言葉だったが、追い込まれた状況を考えると止むを得ない気もした。

我がチームのエースである神崎も監督の声を聞いて、心なしかホームベースの内側に足を踏み込む。

俺は、神崎がボールに当たる決意を潔くしたのだと理解した。

相手のキャッチャーは、そんな神崎の様子を注意深く見ている。そして、投手にサインを出していた。

キャッチャーのサインを確認すると、最後の投球にするつもりなのか、自信満々の表情で頷くと、小生意気ないがぐり頭は投球フォームに入り、球をミットめがけて勢い良く投げ込んだ。

それと同時にキャッチャーは瞬時に立ち上がった。

投手から、投げ出された球は大きくストライクゾーンとかけ離れたミットに吸い込まれる。

そう、相手のキャッチャーはしたたかな奴で、わざとボール球を投げさせて外したのだ。

しかし、神崎の奴はタイミングを外された衝撃と共に空振りをし、バットを手から離してしまうという失態をやらかしてしまう。

そして、審判は大きな斬るようなアクションをして空振り三振を宣告したのだった。

その瞬間に、監督の「バカ野郎」の罵声と共に、握られていたメガホンがグラウンドに投げ入れられた。

上手い具合に神崎が投げ捨ててしまったバットの横に、監督の怒りを表すかのように曲がったメガホンがちょこんと横に並んでいた。その状況を見て、監督が怒るのも無理はなかったと思えた。

元々、中学生とのこのカードは、監督のつてを辿って組まれたものだったからだ。

それは、あまりにも俺達野球部が弱いものだから、せめて中学生だったら勝てるだろうし、勝って自信もつくだろうと監督の温情によってもたらされたからである。

それなのに、俺達ときたら……。

監督のメンツを丸つぶしにし、完全試合をされてしまうという生き恥を晒す結果をまねいてしまったからだ。いや、それだけではない。ちょうど一ヶ月前に野球部を去って卒業されていった先輩達に顔向けできないし、夢である甲子園出場を厚かましくも狙ってるチームにとっても痛すぎる結末だった。

試合が終了したので、両チームが向き合って礼をした。

中学生達は礼が終わると、格上である高校の野球部に勝ったものだから、おおはしゃぎだった。

まだ、子供なので、言つてはならない言葉も聞こえてきた。

「あいつら、ほんとに弱いな」

俺達は、そんな心もとない中学生の言葉に対して、頭を下にしてうなだれることしか出来ない。

その時、初めて悔しさから俺の目には冷たいものが流れていた。

隣の何人かのチームメイトも涙を流していた。

それは、高校三年になる進級間近の春休みの出来事だった。

最後の夏を前にしては、辛くて厳しい現実なのである。

屈辱で涙を濡らした敗戦からほどなく経った頃。

俺達野球部は、夏の甲子園目指してグラウンドに立っていた。

しかし、悔しく思ったのはあの試合の時だけであって、チームはいつもの状態に戻っていた。

いつものつてのは、だらだらとメリハリのないものだ。

そもそも、部員の多くは「野球をやっていたら女子にモデルのじやないか？」と安易な動機で野球を始めたものが多く、現に進級してからというものの、サッカー部に転向したものが数名いるほどの体たらくぶりなのだ。

それと、先日野球部を卒業という形で去つていかれた先輩達や他のクラブに転向したものがいたことから、野球部は試合が出来るギリギリの人数を保つのが精一杯の状態だった。あとは、新学期が始まってからの新入部員が何名チームメイトになつてくれるかによつてが重大なことだ。つまり俺達野球部は存続の危機といつていいほどの状態なのだ。

でも、そんな危機感など誰も持つてはいない。

ただ、どうでもいい事に口うるさかった先輩がいなくなったことが野球部全体をゆるい雰囲気にならせてくれていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7584j/>

---

エースはJ O K E R

2010年10月8日21時41分発行